

るが Terzaghi, Hotharway らの西側技術者たちの調査・設計段階での貢献はもっと高く評価されるべきである。西側の設計が煮つまった段階で第二次中東戦争が始まり、ソ連がそのまま引継いで施工したというのが真相のようで、現代政治が生み出した東西両陣営の共同作品がハイダムといえよう。

エジプトの街では、ロバと高級乗用車が共存しているが、土木分野においての過去の輝かしい栄光と現代政治と未来におけるバラ色の夢が奇妙に混在している印象を気ままに記したものである。

(筆者・Masayuki NAKANO, 正会員 鹿島建設(株)
エジプト製鉄所(在エジプト))

海外業務雑感

加藤 欣一



インドネシア、サウジアラビア、フィリピン、マレーシア等と、アジア、中東諸国の国名とそのプロジェクト名が近年私の人生記録各年の表題になってきた。コンサルタントエンジニアとして十余年、各国の土木計画に参画してきたが、“土と木”とのつき合いを通して海外のいろいろな文化や人々に触れてきた。

コンサルタント業務は調査、設計および施工管理に大別されるが、海外での仕事はこのいずれをとっても相手国の“地と人”を知ることが必須であり、いかに早く現地と融和することがプロジェクトを遂行する上での大きなポイントとなる。行動原理、思考様式が異なる対象国の中で、外国人エンジニアの提示する成果品は“自国の慣習”に溺れがちになり、相手国諸事情との融合性に欠ける面が多々あることを感じてきた。

エンジニアは、技術以外開発者としての要件、文化に対する理解、説得力、体力、語学力を備えていなければならないといわれる。中でも相手国の文化を知ることと理解する努力が最も大切であり、各国特有の気質や特徴を知る上で大いに役立つ。この努力なしに相手国の特色に合致した成果品造りは困難だ。開発途上諸国への技術輸出は、一つの建造物を完成させるための技術のみならず、完成されたものが相手国文化の中でもつ“civil”としての意味合いを明確にさせることが大切と思われる。

相手国の文明の程度を知ること、比較的簡単である。空港での税関や入国管理のシステム、係官の対応ぶりをみればおおよその見当はつくものである。しかし文化を知ることとはそれほど単純なものではない。それは長く各国の歴史、風土地理の中で培われたもので、外国人が簡単に理解できるものでも批評するものでもない。文化は衣食住に反映されている。外国文化を知るためのとり早い方法は、相手国の衣食住に積極的に触れることがよい。ホテル住いで日本食堂通いでは、文化を吸収、理解する上でハンデが大きすぎる。仮にエンジニアを料理人とすれば、日本食の作り方しか知らない料理人が、外国の地にあつて現地の人々をもてなす料理が作れるだろうか。ともすれば日本料理のみを得意とし、それを作りたがるエンジニアは土木計画という味わいの深い料理を作る板前として、巾広く現地の材料の使用方法和作り方を学び、現地人に合った“日本式現地料理”を作る努力が必要と思われる。

若きエンジニア諸君、国際化時代の到来に合せ、包丁一本晒にまいて板場の修業に出る旅立ちの準備はいかがですか。

(筆者・Kinichi KATO, 正会員 (株)パシフィック
コンサルタントインターナショナル 交通開発部)

戦禍の中の土木技術者

高津 俊司



昭和 57 年 4 月から外務省に出向、在イラク日本大使館に 3 年間勤務し、この 4 月に帰国した。

イラクは中東の産油国で、イラン・イラク戦争勃発前には日本の建設・プラント業界が大プロジェクトを次々と受注したが、長期化する戦争の影響により工事量は激減した。しかし、多くの日本人建設関係者が工事の完遂のため開戦後も危険を冒しながら各地で仕事を継続しており、海外建設工事の大変さを痛感した。

バグダッド市内の高層アパート建設現場作業所が空襲で被弾し、千名以上のインド、スーダンからの外国人労務者が騒ぎだし收拾に苦労した例、バスラ港湾現場内の完成した倉庫が被弾し鉄骨があめのように変形した例、砂漠の中の高速道路現場で不合理な盛土の施工管理で工